

コロナ禍の初年次教育，あるいは， コロナに押された初年次教育 —大正大学チュートリアル教育「現認報告」—

成田秀夫
大正大学

First-Year Experience with Coronavirus or First-Year Experience “Boosted by Coronavirus”: Report on Tutorial Education at Taisho University

Hideo NARITA
Taisho University

1. プロローグ—コロナに背中を押された？—

このエッセイを執筆している最中の2021年1月7日，政府は2回目となる「緊急事態宣言」を発出した。遅きに失する感もあるが，東京の街には不安と弛緩のない交ぜになった不思議な感覚が漂っている。つい最近までやや他人事に感じられた「陽性者」が手の届く半径まで到達している感覚は，半透明の膜に覆われた殻がいつ破られるのかというぼんやりした緊張感を孕んでいる。

まさにこの1年，日常は変容したのだ。寒風の吹きすさぶ街を歩く人々は，室内でもけっしてマスクを外さない。対面授業が再開された教室では，マスクは感染予防の免罪符と化している。アルコール消毒液，アクリルパネル，サイマルカメラ，かくのごとくコロナを忌避するモノに囲まれて生きるわれわれは，しかし，コロナに背中を押されている！という密かな思いを抱きはじめているのではないか。今回，改めてこの1年をふり返ると，この思いはいよいよ確かなものを感じられてくる。

このエッセイは，筆者が奉職する大学を代表するものでもなければ，一緒に働いている仲間を代弁するものでもない。筆者個人の思いを綴ったものに過ぎないが，学生とともに生きる人々の共感を少しでも得られたら幸いである。

2. コロナ以前

2020年4月。大正大学は100名のチューターとともに，新たな試みをはじめたはずであった。大正大学は，第3期マスタープランにもとづき，「新共生主義」の確立，「地域人スピリット」の醸成，アントレプレナーシップの養成，「DAC(ダック)」による総合学修支援，「すかもオールキャンパス」構想を掲げている¹。

初年次教育に関わる「『DAC』による総合学修支援」とは，次のようなものである。総合

大正大学 h_narita@mail.tais.ac.jp

表1 2020年度「探究科目」と教育目標の関係(学生は各テーマ群から1科目選択)

科目	育成する資質・能力		テーマ群
人間の探究	①主体的学習態度＝自ら進んで学習しようとする態度を持つ。	④自己管理能力・キャリア意識＝将来を見定め、力強く生きていこうとする。	A) 哲学する人間 B) 学びとリベラルアーツ C) 幸福についての人生論 D) 仏教的な生き方に学ぶ E) 文学にみる近代 F) 現代アートの人間学
社会の探究		⑤対人力＝他者を活かす力を持ち、共生を目指そうとする。 ⑥地域密着力＝巣鴨を自らの学びと他者との共生の場としようとする。(巣鴨学)	A) 共生社会 B) 超スマート社会の光と影 C) 近代を問い直す D) 社会の課題を解決する力 E) ソーシャルメディアの言語技術
自然の探究		⑦課題解決力＝自ら進んで地域の課題を発見し、他者と協力して解決する。	A) 地球サステナビリティ B) グリーンインフラ論

学修支援機構 DAC とは、大正大学の建学の理念、教育ビジョン及び運営ビジョンを具現化するために2020年に発足した共通教育を担う組織である。DACはそのビジョンである Diversity Agency Community の頭文字を取ったもので、総合学修支援機構の略称ではない。具体的には、共通科目(本学では第Ⅰ類科目と呼称)のカリキュラムの構築及び運営、チューターの養成及び運用、ラーニングコモンズの活用推進、アントレプレナーシップ教育の企画及び運営などを行い、学生の多様で自律的な学びと成長を総合的にサポートすることを目指している。学科での学び(本学では第Ⅱ類科目と呼称)と連携し、学科をつなぐ HUB としての機能が期待されている²。

DAC の共通教育の特徴は「統合型の新教養教育」と「チュートリアル教育」である。

統合型の教養教育とは、科目名が教育内容を表す従来型の教養教育ではなく、初年次教育、教養教育、キャリア教育を統合的に推し進めようとするものである。人間の探究科目、社会の探究科目、自然の探究科目には、それぞれ複数のテーマが設定されており、学生はそれぞれの探究科目から1つずつテーマ名のついた科目を選ぶことになっている。ここまでは極めてオーソドックスなカリキュラムである。(表1参照)

しかし、授業の組み立てと運営の仕方はひと味違っている。各探究科目で掲げるテーマについて担当する「専門パートの教員」と、アカデミックスキルズやキャリア教育を担当する「共通パートの教員」が一緒になって授業の組み立てを考え、一緒に授業を運営する。

第Ⅰ類科目では2020年度の教育目標として、主体的学習態度、知識理解力、自己管理能力・キャリア意識、対人力、課題解決力、チャレンジ精神、地域密着力(巣鴨学)の7つを掲げているが、これらの教育目標を人間・社会・自然の探究科目にバランス良く割り振り、探究科目全体で目標が達成できるようにカリキュラムを編成している。

主体的学修態度や知識理解力はそのどの科目でも共通するものであるが、人間の探究では主に自己管理能力・キャリア教育を、社会の探究では主に対人力、地域密着力(巣鴨学)とプ

レゼンテーションを、自然の探究では主に課題解決力とライティングを学べるように組み立てた。たとえば、人間の探究には「哲学する人間」など6つの科目テーマがあり、学生は6つから1つの科目テーマを選択することになるが、人間の探究ではどのテーマ科目を選択しても、自己管理能力・キャリア教育は共通に学べることになる。共通パートはDACの専任教員が共同して開発し、専門パートを開発した教員と課題や評価について協議し、探究科目全体での整合性を図っている。

DACのもう一つの特徴は「チュートリアル教育」である。もともとチュートリアル教育は、イギリスの高等教育における学生主体、少人数制の授業形態を指すものであるが、現代では、PCソフトやハードを初めて使う人向けに機能や使い方の概要を教えることや、医学教育におけるPBL (problem-based learning) などで少人数グループに対し1名のチューターと呼ばれる教員が付いて行われている教育形態を指す場合に使われている。DACではチュートリアル教育を「学修者の主体的な学びと成長を総合的に支援するための教育体制」と定義し、学修者の状況の的確に把握し、少人数グループ単位で支援する学修支援体制を敷いている。

DACでは約30名の学生に対して教員やチューターが1名つくように配置されているが、そもそもチューター経験者を大勢集めることは困難である。

そこで、本学では、無料の「チューター養成講座」を開講し、チューターを育成採用することを試みた。

チューター養成講座は、座学のナレッジ・セッションと実際の支援方法をまなぶハンズオン・セッションからなっている。ナレッジ・セッションでは、グループのファシリテーション、個人のコーチングやキャリア・カウンセリングなどの学修支援について学ぶだけではなく、その道の識者から日本の高等教育の現状やカリキュラム論、評価論なども学べるようにした。ナレッジ・セッションの修了者のみがハンズオン・セッションに進み、そこでの評価に基づいて採用者を決定した。

2019年6月から本学のホームページや asagao メーリングリストなどを通じて募集したところ、7月22日までの公募期間に211名の応募があった。応募者の内訳は、男女比はほぼ半々、平均年齢は41.41歳、大卒45.5%、院卒48.8%、キャリア別人数(重複含む)は教育関係(高校・大学・塾予備校教職員)が100名、企業関係63名、個人事業主33名、キャリアカウンセラー等20名、その他5名であった。最終的にはコア・チューター6名、クラス・チューター85名に採用通知を送った。

クラス・チューターは時間給で雇用されており、実際に授業に入りグループワークなどを支援すると同時に、授業外での学修支援を担当する。コア・チューターはフルタイムの任期制専任として雇用され、クラス・チューターと同様の学修支援と同時に、クラス・チューターの管理やさまざまな学修支援のニーズに対応する。

こうして、2020年は、新しい学びのスタイルが始まるはずであった。

3. コロナ動乱！緊急事態宣言発出

2020年3月、本学にはまだ差し迫った緊張感はなかったものの、コロナ感染症の対策に連日追われていた。入学式は中止となり、連休までの2週間だけをオンデマンド型のガイダンスや授業でしのぎ、連休明けから対面授業を開始する、今から思えばそんな「甘い

計画]であった。

しかし、安倍総理大臣(当時)が4月7日に東京、神奈川、埼玉、千葉、大阪、兵庫、福岡の7都府県に緊急事態宣言を発出してから事態は一変する。

4月14日の学長室会議(当時)の決定を受け、春学期授業のオンライン化が決定した。前日の深夜まで連休明けの対面授業に備えた作業はすべて水泡と化す。全面的なオンライン授業の開始に向けて、連休明けまでに体勢を整えなければならない。第I類を担当する教員に、オンライン授業への転換と、それに伴うシラバスの書き換え、教材の再編成を依頼すると同時に、オンライン授業への移行に向けた教員説明会の準備をしなければならなかった。

本学では教職員からなる「オンラインサポートチーム」が組織され、資料等を提示してレポートなどの課題を提出させる「資料・課題提示型」、講義内容を動画収録・配信してレポートなどの課題を提出させる「オンデマンド型」、ZoomやTeamsなどのテレビ会議を活用した「ライブ配信型」、テレビ会議を用いたゼミ形式の「ディスカッション型」の4つの手法を提示、必要に応じてそれらを組み合わせて授業を行うことが提案された。

全面的なオンラインへの移行に際して、学生には大きな問題がみられなかった。オンラインに切り替えられたガイダンスや履修登録では、経験のある在校生はスムーズに対応できたのはもちろんだが、新入生の脱落者もいなかった。約1,200名の新入生にガイダンスを実施するオンデマンド配信システムへの案内を郵送したが、約900名はなんの問題もなくアクセスできた。残る300名は教職員が一丸となって電話がけし、登録を促したりサポートしたりすることで完了した。高校生のITスキルに大きな問題はなかった。

むしろ教員だった。黒板とチョークによる講義に慣れ親しんだ教員には少々ハードルが高く感じられたようである。普段からPCやIT機器を用いた授業を展開していた教員はなんの負担も感じなかった一方で、Zoomのアカウント設定すらままならない教員もいた。しかし、ここで活躍したのがオンラインサポートチームである。教員からの問合せに丁寧に対応し、最終的には1人の教員も取り残されず、オンラインへ移行することができた。

ここで特筆すべきはチューターたちの凄まじい活躍である。一人ひとりの学生に寄り添い、「1人も取り残さない」という思いの中で、チューターが寝食を忘れて学生を支援したからこそ、今があると言っても過言ではない。オンライン授業が始まった頃、なかなかテレビ会議に参加できない学生をフォローしたり、授業中も教員と連携して声かけやサポートに回ったり、授業後も(深夜に及ぶこともあったようであるが)学生からの問合せや相談に親身に応えたり、チューターとしての本領を十分に発揮してくれた。感謝してもしきれない思いである。

連休が明け5月も中旬になるとオンラインに関する課題は解消された。これは学生の柔軟な対応力と教員、職員、チューターが共同して取り組んだ成果である。一丸となってコロナに対応したのだが、今とってみると、コロナの中でなんとか大学を平常にしなければならないという暗黙の意志こそが、教職員、そして学生を一体化させた立役者のように思えてならない。

ただし、二度とあの混乱には戻りたくない。深夜の会議で寝落ちしたこと、オンとオフの見境がなくなったことなど、リモートワークのあるべき姿からはほど遠いものであった。組織として総括すれば「多少の混乱はあったものの、スムーズにオンラインへ移行で

きた」ということになるだろうが、パウル・ボイメルが戦死した日、司令部報告には「西部戦線異状なし」³と記されていたことを思い出したのは大げさ過ぎるだろうか。

4. コロナがもたらす錯覚、「最先端の授業!？」

6月にもなると、学生も教員もオンライン授業に慣れてきた。直接相對して話せないことのもどかしさもあるが、オンライン授業にメリットが多いことにも気がつき始めた。

特に Teams などのテレビ会議では、チャット機能が抜群の効果を示した。対面の授業で学生の意見を求めても、なかなか発言できない者が多いが、SNS に親しんでいる学生たちは、物怖じせずチャットの書き込みができる。教員はことあるごとにチャットで意見を求める。対面なら数人の意見を聞いて終わりだが、チャットなら参加者すべての意見を知ることができる。対面授業で学生の理解度を確かめるためにあの手この手を使ってきたが、あつという間にチャットが学びの可視化ツールに躍り出たのである。

また、動画を視聴したり、遠隔地からゲストが参加したり、他地域の人々や学生とディスカッションしたりと、これまで教育の IT 化として推奨されてもなかなか広まらなかったことが、ものの1ヶ月でスタンダードになっていたのである。まさにコロナが背を押したのである。

そして、夏を迎える辺りから、奇妙な昂揚感を抱く教員たちを目にすることになる。われわれこそが教育の最先端だ!と。程度の差こそあれ、どの大学でも行われていることではあるが、当の本人からすれば今までにない画期的なことをしている、と思えたのだろう。ここは当人たちの思いを腐すのではなく、FD が進展したと喜ぶべきだろう。

これを機会に教育の ICT 化が進むことを望むものだが、ツールと教育や学びがつながることが大切であろう。目的と乖離した、使うだけのツールにならないことを祈ってやまない。

ちなみに、本学の実施した学生アンケート調査では、「課題提示型」における課題量の多さや「ライブ配信型」における受講にあたる不安などがみられた。ライブ配信型における不安は、通信環境やその他受講環境に関わるものが大きいと推測される。一方、「オンデマンド型」では「この授業形式には問題がなく、良かった」の割合が最も大きい。学生の受講環境差を踏まえても、幅広く受け入れられていることから、公平な学修機会を設け

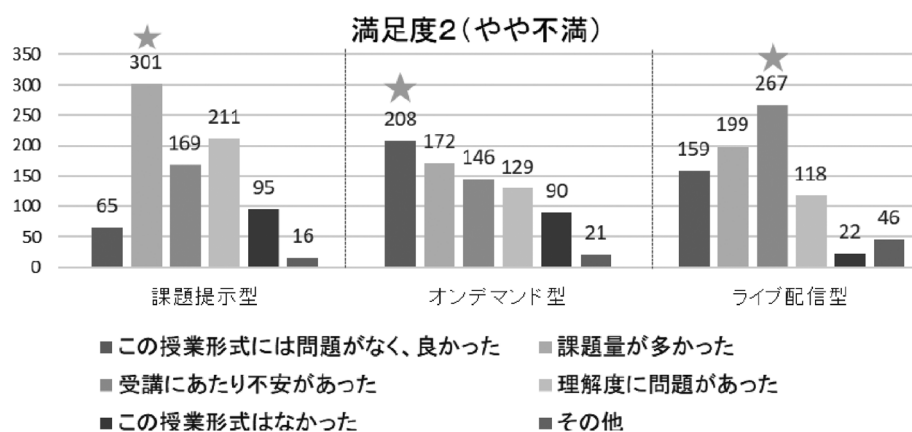


図1 オンライン授業学生アンケート結果(大正大学令和2年度オンライン授業報告書)

るために「オンデマンド型」の活用も取り入れていくべきであろう。

5. 対面授業へ—苦渋の選択

オンライン授業が落ち着きを見せてきた頃、本学でも、対面授業をしないのなら授業料や施設費を返金せよという声が聞こえはじめた。これに拍車をかけたのが、大学も対面授業をやるべきだという萩生田光一文部科学大臣の発言であった。対面授業に復帰したいのはやまやまであるが、学校やクラスサイズの異なる小中高と大学が同じ土俵で論じられていることに違和感を抱いた。中規模とは言え、本学の学生が登校すれば西巣鴨の狭いキャンパスに5千人近い人間が轟めくことになる。「密」にならないわけがない。本学の学生の意見も半々で拮抗していた。

苦渋の選択として、オンライン授業を堅持しつつも、秋学期からはゼミなど少人数で行えるものは対面も可とすることになった。登校初日の光景は忘れがたい。久しぶりに再会できた上級生たちはもちろんだが、初めて「対面」で仲間と会えた1年生の歓びは大変なものだった。「生」で動いている私の姿をみて駆け寄ってきた学生もいた。毎日テレビ会議で話していた同僚から「お久しぶりですね」と言われて文字通り眩暈に襲われた。

このまま対面とオンラインの併用で、本年度は最後まで行くのではないかと思い始めていた。

6. 再び緊急事態宣言

その思いを砕いたのが2度目に発出された緊急事態宣言である。年末年始の休みを挟んで、東京をはじめとした首都圏では深刻な事態になっている。そして今、プロローグで述べたような「ぼんやりした緊張感」につつまれているのだ。

2度目の緊急事態宣言は、われわれに次に来たるべきことを突きつけている。もはやコロナ禍前の日常には戻れないだろう。ウイルスは瞬く間に変異し、われわれの前に迫ってきた。ウイルスこそ、この惑星の正統な住人であるかのように。生物ではないが生物のかげらのような物質に、遺伝子情報の転写という生命現象のプリミティブなところから、われわれが生きることの意味を問いかけられている。

もはやコロナウイルスは、われわれの物質的な環境のみならず、社会的環境、そして精神的環境にまで入りこんでいる。ウイルスとの共存などという生やさしい言葉では表現できない「ニューノーマル」の世界が到来しているのだ。試されているのは、われわれの政治システム、医用システムだけではない。われわれ自身が試されている。

7. エピローグ—真価が問われる初年次教育—

しかし、今の私にウイルスへの回答はできない。ただ受け止めるだけである。暫くはもがくことから抜け出せないだろう。だが、4月は必ずやって来る。新たな学生を受け入れるためにも、今やれることをしっかりやるしかないだろう。2度目は言い訳ができない。初年次教育を担うものとして真価が問われている。

最後に「自分への覚え書き」として、これからの展望をまとめておきたい。

① 授業の組み立てについて

- ・対面に復帰してもオンライン授業の利点を取り入れる。

- ・とりわけ、チャットなどで学生の理解を可視化することは必須だ。
 - ・ハイブリッド型やハイフレックス型の授業はできるところから取り入れる。ただし、教員に強制することはしない。混乱するだけである。
 - ・ICT ツールを用いる際には、教育目標と照らして親和性の高いものを用いる。
 - ・対面授業を基調としつつ、オンラインに転換できるようプラン B を用意しておく。
- ② 感染症対策
- ・現行の感染症対策を怠らずに実施する。ワクチンなどに関する情報ははじめ的確に情報収集する。
 - ・ただし、科学的に確立した対策が見つからない限り、対策には限界がある。
 - ・トラブルが起きた際には、他人のせいにせず、自分事として捉える。
 - ・ひとりで抱えこまず、仲間と相談しながら進める。
- ③ ニューノーマルへの対応
- ・経験を汲み上げてナレッジ化する。
 - ・特に人と人との新しい関係を柔軟に構築する。

こうして覚え書きを書いている、途方に暮れるばかりである。われわれにできることは目の前の課題を丁寧にひとつ一つ潰していくことかもしれない。ウィルスのスピードには敵わないが、ウィルスでさえも自ら接した環境の中で変化しているのだ。課題と関わることでわれわれも「変異」していくのではないだろうか。

注

- ¹ 参照：<https://www.tais.ac.jp/p/tu-innovate/>
- ² 参照：<https://www.tais.ac.jp/faculty/dac/>
- ³ エーリヒ・マリア・レマルク『西部戦線異常なし』